

書林

第 105 号 2024 年 11 月 15 日発行

巻頭言	1 - 2
図書館同好会おすすめ本・イベントレポート・ 3	
私の薦めるこの 1 冊	4 - 7
自著紹介	8
Welcome to SGU Library	9
利用統計/蔵書統計	10
from Library	11
編集後記	12

巻頭言

知的好奇心を刺激する学び舎

—チューリッヒでの研究生活から—

橋長真紀子/経済経営学部教授

2023 年 9 月から 1 年間、スイスのチューリッヒ大学社会学研究所にビジティングスカラーとして在籍し、同大学の研究者と共同研究を行う在外研究の機会をいただきました。滞在期間中は、共同研究者との研究に関するミーティングの他、調査の実施、論文執筆などを行いました。また、同時に連邦工科大学チューリッヒ校、チューリッヒ大学、チューリッヒ芸術大学の共同高等研究所/コレギウム・ヘルベティウムにもシニアフェローとして在籍し、世界中から私と同じ立場で来ているフェローと共に毎週の学術セミナーに参加しました。このセミナーは、医学、工学、自然科学、社会科学、人文科学、芸術など、様々な専門領域の研究者が一同に介して議論を行う学際的なセミナーでした。通常、近接した分野の研究会で議論を行うことが多いため、多種多様な領域の研究を学ぶ機会は大変貴重な経験で、分析方法も分野によって異なり、多くの示唆を得ることができました。

私の研究領域は、最新の研究論文をオンラインで入手することが多いため、実際に図書館で研究

をするというより、図書館のデータベースにアクセスし論文を検索することが主な文献調査でした。チューリッヒ大学の大学アカウントでは、ほとんどの論文が無料で閲覧・ダウンロードでき、大変充実した研究環境でした。また、チューリッヒ大学では、メインキャンパス、イヒエルキャンパス、オエリコンキャンパスの各学部の校舎に図書館があり、全体で 30 以上の図書館が学内にあります。中でも、法学部の図書館は、大学で最大の図書館で、勉強スペースが 558 席、その他にミーティングルームもあり、年末年始以外は、毎日利用可能です。図書館の中央に楕円形の吹き抜け



写真引用：University Library Zurich,
<https://www.ub.uzh.ch/en/ub-besuchen/standorte/recht.html>

があり、その吹き抜けに向かって勉強スペースが配置されているため、勉強する人それぞれが、快適な日差しの元、自分の勉強に集中できる構造になっていました。吹き抜けの一階では、様々なイベントも催され、学術シンポジウムや音楽会など、吹き抜けを活かした市民公開型のイベントも行われています。以下の写真は、同じ時期に日本からビジティングスカラーとしてチューリッヒ大学に在籍していた研究者の講演会で、在スイス日本大使館との連携イベントの様子です。地元の日本人会の和太鼓クラブの演奏もあり、コンサートホールでの演奏会のような一時でした。

図書館の営業時間は、図書館毎に異なりますが、自動入室は、7:00 から 23:00 まで、司書の方が図書検索のサポートをしてくださるのが、9:00 から 17:00 までが多いようです。図書検索やミーティングスペースは、学内システムで事前予約ができ、学内外の学びの連関がシステムに

より整備され、学生 1 人 1 人のニーズに合わせ、学びを深化させることができる環境でした。



図書館からのお知らせ

今号に掲載した記事の一部は、図書館ブログにも掲載しています。
図書のおすすめの他、図書館イベントや企画展示など、
図書館を楽しみ、活用するための情報が盛りだくさん！
ぜひお気軽にのぞいてみてくださいね！



ブログ URL(右上の QR コードからもアクセスできます)
<https://sgu-library.hatenablog.com/>

図書館同好会おすすめ本

『放課後ひとり同盟』

小嶋陽太郎著／集英社文庫

皆さんは何か悩みを抱えたとき、どのように対処するでしょうか。

この『放課後ひとり同盟』は、ほんの少し人とずれた悩みを抱える 10 代の青春と葛藤を描いた短編集です。

空から降ってくる不幸を来る日も来る日も蹴り、起こりうる不幸を防いでいるという「蹴り男」と女子高生の物語、「空に飛び蹴り」。体と心の性の不一致に悩む三兄弟の長男の物語、「怒る泣く笑う女子」。恋に盲目な女子高生とまるで人間であるかのように振る舞う犬の物語、「吠えるな」。ある人が忘れられないバイト先の先輩と後輩の物語、「ストーリーテラー」。人の悲しみがぐるぐるとなって視える男の子の物語、「僕とじょうぎとぐるぐると」。どれも悩みは解決しませんが、人との出会いが登場人物たちを変えていく物語です。



私は古本屋で表紙に惹かれてこの本に出会いました。繊細な心理描写が巧みで、つい感情移入してしまい、心が痛むような描写もあります。しかし、自分の視野の狭さと新たな視点の存在に気付くきっかけとなりました。読み終えた後には明日からも頑張る生きようという勇気を与えてくれるような作品だと思います。

新しい世界を見つけたくなった方、少しでも気になった方はぜひ読んでみてください。

心理学部1年
図書館同好会(新札幌分館)所属

所蔵情報

【江別・2 層書架:文庫 913.65/KOJ】



イベント レポート

2024 年 9 月 25 日(水)紀伊國屋書店札幌本店にて、ブックハンティングが行われました。

?ブックハンティングとは?

書店に直接うかがい、図書館に置きたい本を選ぶイベントです

紀伊國屋書店札幌本店は、札幌駅のすぐそばにある書店さん。1・2 階からなる広いフロアには、さまざまな本が並んでいます。参加者は店内を自由に歩き回り、図書館に置いていろんな人に読んでほしい本、興味はあるけど自分ではなかなか手が出ない本など、思い思いに選んでいました。

ブックハンティングに参加したい人！
図書館同好会に入りませんか？

いつでも新メンバー募集中！
同好会のインスタをチェックしてね♪

ブックハンティングで購入した図書は、選んだ人が作ったポップと合わせて、江別・新札幌それぞれで展示します。お楽しみに！



出発前の説明を受ける参加者

■私の薦めるこの1冊■

『朔が満ちる』 窪美澄著／朝日新聞出版社

私は2017年4月からこの大学でキャリア支援の仕事をしている。

学生のみなさんの話の中には、「親」というワードがよく出てくる。

少し前に「親ガチャ」という言葉が流行った。文字通り、子どもは親を選べない。家庭環境、容姿、名前、性格、性別、国や地域、時代…何ひとつ選べずにこの世界に生みおとされる。

この不平等感をあらためて痛感させられたのが、窪美澄さんの『朔が満ちる』という小説である。この作品は、2021年7月に朝日新聞出版より刊行された（私は今年の7月に新札幌の紀伊国屋書店で文庫本を購入した）。

物語は、主人公である史也が、実の父親からすさまじい暴力を受ける場面からはじまる。13歳の史也は、小学生の頃から酒をのんでは暴れる父親にたいし、「明確な殺意」がある。青森の山村にある、裕福な母方の父親が建てたロジ風の一軒家には、薪置き場があり、斧がある。ある日、その斧が史也の手によって父親の後頭部に振りおろされる。

父親は死ななかったが、身体の半分が動かさなくなった。この事件は、母親と、現場に居合わせた町の駐在さんによって「事故」として取り扱われる。13歳だった史也は28歳になり、「ごく普通の家庭に生まれたごく普通の人間です、という顔をして」、建築専門のカメラマンとして東京で働いている。

手に後遺症が残るほどの暴力をふるった父親と、その父親から最後まで守ってはくれなかった母親への、強烈な怒りと憎しみを史也は抱えている。そんな日々の中、梓という女性と出会う。梓は、表向きは東京育ちの看護師として暮らしているが、実は生



後すぐに乳児院の前に捨てられて、児童養護施設で暮らし、10歳の時に養子になったことが明らかになる。梓は、勤務先の院長である父親がつけてきた相手と結婚させられそうになったところを、医院の患者であった史也を頼ってアパートに

転がり込む。やがて二人の地元が同じ青森であることがわかる。ある出来事によって、二人は青森を訪れる。そこで、梓は自分を捨てた母親に、史也は父親と母親に会う。

この物語で、親に癒えない傷を負わされた史也と梓は、最後まで親を許したりはしない。許さないまま、恨んだまま、「最低最悪な子ども時代」を、自分たちの力で終わらせる。そして、「親のことを悪く言うてはいけない」、「親なんだから、あなたを愛しているよ（許してあげて）」といった世の中の空気を嫌悪し、否定している。

「人生の始まりがこの家なんて、神様はなんて不公平なことをするんだろう」と梓は言う。先に述べたように、私たちは何ひとつ選べずに生まれてきて、その後の人生においてさえ、自らの意志で選択できることは限られている。

学生から進路の相談を受けるとき、自分の価値観に基づくアドバイスは極力控えるようにしている。けれど、こっそりと心の中で願っていることがひとつある。それは、梓が育った児童養護施設の職員さんの「（自分が）幸せになることだけを考えない」。という台詞に集約されている。

萩原亜美／キャリア支援課

所蔵情報

【江別・2 層書架:文庫 913.65/KUB】

『「安心のタネ」の育て方』 浅井咲子著/大和出版

現代は「ストレス過多社会」「不安の時代」と言われています。様々なストレスや不安を抱え、心理的な苦痛に悩まされている方々に共通すること、それは「心理的安心感」が得られていないということです。このような時は誰かに相談するエネルギーも勇気もでないかもしれません。そんな時に寝転びながら、気軽に眺める感じで読めるものとしてお薦めしたい本です。この本は、安心感を得るための土台となる、からだやこころに働きかけるコツについて、具体的かつわかりやすく、読みやすく書かれています。動物たちのイラストもあり、それを見るだけでほっこりしてきます。また、臨床心理学や精神医学で最近注目されている「ポリヴェーガル理論」にのっとって書かれており、ストレスやトラウマケアに向けて自律神経とうまくつきあうコツがエクササイズとともに説明されています。

自律神経という言葉はご存じでしょうか？聞いたことがあってもよくわからない方が多いかもしれません。私たちのこころとからだは自律神経がバランスをとりながら健康を保っています。しかし、自律神経は意図的にコントロールするのは難しいとされています。例えば、人前で発表する

際に緊張してドキドキしてしまうことはどうにもならないので、益々緊張と不安が高くなるという悪循環に陥ってしまう…。ここから脱するには、自分のからだの内部感覚を磨き、「これはどうにかなる＝予測がたつ＝私は大丈夫」（内なる予測性）という安心の感覚を取り戻すことが必要です。そしてこの内なる予測性を育むには自律神経の土台を整えることが大事なのです。もしかしたら、日々の生活の中で当たり前に行っていることが意味づけられるかもしれません。この本で、自律神経のメカニズムを理解し、「安心のタネ」が育つような、からだとこころの土壌としての自律神経に働きかけるコツをつかんでほしいと思います。

日々、頑張りすぎて疲れている、何もする気力がない、誰とも会いたくない、でもとりあえず何か元気になるきっかけが欲しいという方々に、ぜひ手にとってもらいたいお薦めの本です。



齊藤美香／心理学部臨床心理学科教授

所蔵情報

【札幌・固定:和書 書架番号 1-22 146.8/ASA】

『星降り山荘の殺人』 倉知淳著/講談社
『葉桜の季節に君を想うということ』

『十角館の殺人』 綾辻行人/講談社
歌野晶午著/文藝春秋

私は推理小説が好きである。その中でも「叙述トリック」と呼ばれる技法が使われた推理小説がたまたま好きである。叙述トリックとは、誤解を恐れずに言えば、小説の文章を読んでいると、先入観や思い込みから自ずと“誤読”して文章を読んでしまい、それによって読者は、犯人に関する記述や事件の全貌を読んでいたにもかかわらず“見逃してしまう”あるいは“騙されてしまう”現象である。注意深く読んでいても騙されてしまうことは多々あり、私は騙されたときの感覚がこの上なく好きなのである。1冊の本、1つのストーリーを読んでいたはずが、急に違う本、違うストーリーを読んでいるかのような感覚に落ち入る。しかし、だからと言っても全く別の話になっているのではなく、話がつながっているのである。騙されたという悔しさ（嬉しさ？）と、それでも話がつながっているという快感、他の小説にはない読後感を味わえることが叙述トリックの魅力である。

叙述トリックを使った推理小説は多くあるが、今回はその中でも私が好きな1冊を紹介したい。

今回紹介する1冊はこちら。

『星降り山荘の殺人』倉知淳 著 講談社



ただ、叙述トリックの本を紹介することは難しい。なぜなら、語ることに全てがネタバレになってしまうからである。

言えることはただ、「読み、騙され、味わえ」である。

もし、この本を読んで気に入ったのであれば以下の本も紹介しよう。

『十角館の殺人』綾辻行人 著 講談社

『葉桜の季節に君を想うということ』

歌野晶午 著 文藝春秋



さて、推理小説の構成は、論文の構成に似ている部分が多いように感じる。

推理小説を読むことは論文作成のヒントになり得るように感じる。

推理小説には、謎を解くための手がかりがあり、検証があり、最後に事件を解決する流れがある。論文も同じである。論文においても問題提起・仮説があり、その問題・仮説を解くための方法があり、その方法で出た結果について考察し、結論を出す流れがある。そして、推理小説に出てくる犯人は、冒頭に登場しておく必要があり、事件に関する手がかりも記述されている必要がある（詳しくはノックスの十戒、ヴァン・ダインの二十則）。つまり、論文においても仮説や結果から導き出された事柄を中心に考察するべきであり、急に他所から関係のない考察をして結論を出すのはアンフェアである。

どうだろう。

皆さんも探偵になったつもりで論文を書いてみてはいかがだろうか。

問題・仮説・問い（謎）に対して正しい手法（手がかり）で正しい結論（犯人）を導き出せるだろうか。

友野貴之／心理学部准教授

所蔵情報

『星降り山荘の殺人』【江別・2 層書架:文庫 913.6/KUR】

『十角館の殺人』【江別・2 層書架:文庫 913.6/AYA】

『葉桜の季節に君を想うということ』【江別・第1 書庫(3層奥:電動書架):和書 913.6/UTA】

『23分間の奇跡』

ジェームズ・クラベル著/青島幸男訳/集英社文庫

サツガクの皆様、こんにちは。本を売る仕事をしている者です。

職業柄、ときどき本をお薦めする文章を書く機会をいただくのですが、そのたびに実感させられるのが、「人に本を薦める事の難しさ」です。

本というメディアはその性質上、読む人の経歴や嗜好・属性など……いわば〈個人史〉によって、ひとつひとつのタイトルの価値が変化します。例えばパソコンの入門書は、ほとんどの場合プログラマーにとっては不要なものです、初めてパソコンに触れる方にとってはバイブルとなり得ます。

つまり、人に適切な本を薦めるためには、薦める相手の〈個人史〉をよく知る必要がある、という事になります。実際に店頭でこのような質問を受けた際も、(私の場合は)お客様がこれまでに読んだ本・好きだった本を逆質問して、どんな本がお薦めできるかを導き出していました。

それでは『書林』のように、不特定多数に向けた媒体で本を薦める時には、どうでしょうか。『書林』をご覧になる方ひとりひとりの〈個人史〉など、知りようがありません。

私がこれまでに見た新聞・Web 書評やコラムに共通する方向性としては、おおむね3パターンあるように思います。①本のあらすじなど、内容の特徴を挙げていくスタイル。このスタイルでは、「この本はこのような人にお薦めです」といった文言が含まれることが多いです。②本の内容を評価するスタイル。推薦者がその分野の専門家であるような場合、読者は「この人がこのように評価しているのだから、良い本である」と判断しやすくなります。③推薦者の〈個人史〉を提示し、読者に共感してもらうスタイル。その本との出会いのエピソードや、普段から問題だと考えている事が解決・緩和した、などのストーリーを交えて紹介する事で、読者にセレンディピティをもたらします。



三つのうちのどのパターンを採用するかは、紹介する本や媒体、筆者の得意な文体などによって決まり、それぞれのスタイルが微妙に混ざり合う事も有ります。今回は③の方針を取って、『23分間の奇跡』という本を紹介してみようと思います。

エミー賞を複数部門受賞した『SHOGUN』原作者、ジェームズ・クラベル唯一の短編で、フジテレビ「世にも奇妙な物語」で映像化もされています。

私がこの本と出会ったのは15年ほど前、地元からほど近い短期大学で、中学国語の教職課程を取っている最中でした。「教職に就くならこれを読め」というようなリストにこの本が載っており、とっつきやすい印象のタイトル、かつ文庫本で安かったので、地元の書店に行って入手したのでした。

本書は日本語訳にしてなんと40ページ程度。行間の余白をたっぷり取った体裁と、裏表紙からは原文を掲載している事によって文庫本の体裁を保っている、非常に短い短編です。ですので、タイトルの通りちょうど23分程度で読破可能な一冊となっています。訳者もあとがきでそう評しているように、まさに「児童書の体裁」といって良いでしょう。

原題は『The Children's Story... (but not just for children)』。本書は子どもたちではなく、大人に向けた問題提起の書となっています。現に教職を志したかつての一学生(私)は、この本を読んで衝撃を受け、教育とは、国家とは何だろうかと真剣に考えるようになりました(結果、なぜ書店員になったのかは別の話)。『書林』をご覧になっている方の中にも、教職を取っている方はいらっしゃると思います。絶対に損はしない23分間になると思いますので、ぜひ一読ください。

あらすじは、「新任の女性教師が、とある教室で起こした一幕」。

これ以上はネタバレにつき、ご容赦を……。

小山大樹／紀伊國屋書店

所蔵情報

【江別・2層書架:文庫 933.7/CLA】

『異界の歩き方——ガタリ・中井久夫・当事者研究』

村澤和多里・村澤真保呂著/医学書院/2024 年



この本を書くきっかけとなったのは、日高地方の浦河べてるの家ではじまった「当事者研究」での体験でした。そこでは幻聴を「幻聴さん」、精神的症状を「お客さん」と呼び、何かの必要性があるから訪ねてくるマレビトのようにもてなすことをしていました。精神

的症状の原因を、心の深層や認知過程といった「内面」に求めるのではなく、どこか外からやってくるものと捉えることに衝撃を受けました。

考えてみると、私たち心の専門家は、この100年ほどの間、心の奥底に「無意識」という領域があって、そこに何かしらのトラブル（トラウマ）がある時に、「意識」の領域でも問題が起こってくると考えがちでした。心の専門家はその深層にアクセスして回復へ導くことが仕事であると。

でも、「当事者研究」にふれてからこう思いました。私たちは心の「内面」ばかりにとらわれすぎていたのではないかな？ これがこの本の出発点にある問いです。

浦河べてるの家のある人の例（向谷地生良『技法以前』医学書院）では、それまで悪口などの幻聴に悩まされていたのですが、幻聴が聴こえときに仲間に親指を立てて合図するというのを始めたら、それが仲間との親密なコミュニケーションを回復する手段となりました。つまり、人を疎外し孤立化させるような幻聴を、聴かないように、聴こえないようにするのではなく、受け止めて「道具」として利用することにしたわけです。これによって、ひどいことをいう幻聴とも共生できるようになるわけで

す。

ここでは心の「内面」は問われていません。幻聴の原因が究明されるのでもなく、それとどのように共生するのかが問われます。ここには心の回復についての考え方の、革命的な転換があるように思いました。

本書では、浦河べてるの家の「当事者研究」を手がかりに、日本において画期的な精神科治療の方法を提示してきた中井久夫の思想、現代哲学に絶大な影響を与えてきたフェリックス・ガタリの思想を交差させながら、そこに流れる共通の思想を浮き彫りにしていきます。

最終的に、私（と共著者）の思索は「エコロジー」という視点に行きつきました。

結局のところ、私たちの心が「病む」のは、心が本来そなえているはずの「自己回復力」を発揮できなくなっているためであると思います。これまで私たち人間は、生命の本性の限界を超えて、過酷な労働環境へと適応しようとしてきました。生物としての自己回復力を超えてしまった結果が、うつ病やひきこもりといったさまざまな「生きづらさ」なのでしょう。（近年よく耳にする「生きづらい」という言葉は、心が持続可能でなくなっていることを意味するといえます。）

生命の回復力を取り戻すためには、私たちを取り巻く環境世界を再構築していく必要なあるのだと思います。

心の持続可能性をひらく鍵は、心のエコロジーの回復にあります。

図書館(教員著作コーナー)にも置いてありますので、ぜひお手に取ってみてください。

所蔵情報

【札幌・コリドール F(教員著作コーナー・展示) 493.76/MUR】

Welcome to SGU Library

イベントレポート



ビブリオトーク

2024年7月4日

新札幌キャンパスで図書館イベント「ビブリオトーク」が開催されました！新札幌では初開催！！

Q.ビブリオトークとは？

自分の **好きな本** について
トーク で紹介するイベントです

読書を愉しむきっかけになったようです 😊

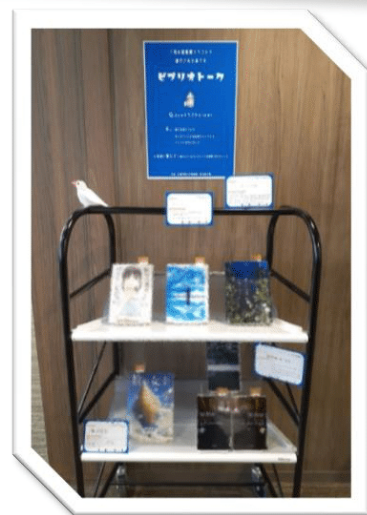


Q.紹介本は展示されてるの？

はい！**新札幌分館**で展示されています！

紹介者のコメントが掲載されたPOPにも注目してね 📖
すでに借りられている本もあります！
早い者勝ちです…！！

社会連携センターホール



2023 年度 図書館利用統計・蔵書統計

表 1. 開館日数

(日)

	通常開館	休日開館	短縮開館	開館合計	休館	総計
江別本館	193	44	90	327	39	366
新札幌分館	283	63	0	346	20	366

表 2. 入館者

(人)

	9:00～17:00	17:00～20:30	合計	1 日当たり
江別本館	55,437	7,044	62,481	191.1
新札幌分館	67,981	15,027	83,008	239.9
合計	123,418	22,071	145,489	420.5

表 3. 貸出冊数

(冊)

	学生・院生	教職員	その他	合計	学生 1 人当たり
江別本館	6,121	4,699	2,594	13,414	1.90
新札幌分館	4,153	1,920	1,245	7,318	1.29
合 計	10,274	6,619	3,839	20,732	3.18

*1 日平均貸出冊数 江別本館 44.2 冊 新札幌分館 18.2 冊

*学生数は 2023 年 5 月 1 日の在学生数+院生数=3,226 名（休学者 64 名は除く）

表 4. 貸出冊数の内訳

(冊)

		学生・院生	教職員	その他	合計
図 書	江別本館	5,680	4,270	2,593	12,543
	新札幌分館	4,048	1,884	1,245	7,177
	図書小計	9,728	6,154	3,838	19,720
雑 誌	江別本館	252	337	0	589
	新札幌分館	70	33	0	103
	雑誌小計	322	370	0	692
図書・雑誌合計		10,050	6,524	3,838	20,412
視聴覚	江別本館	189	92	1	282
	新札幌分館	35	3	0	38
	視聴覚小計	224	95	1	320
総合計		10,274	6,619	3,839	20,732

表 5. 相互協力

(件)

文献複写		現物貸借	
複写依頼	複写受付	貸借依頼	貸借受付
449	931	225	310

表 6. 蔵書冊数

和書	洋書	図書合計	視聴覚	総合計
506,350	133,524	639,874	24,727	664,601

*2023 年度受入冊数：8,411 冊（図書・製本雑誌・視聴覚資料）

*2023 年度除籍冊数：1,891 冊（図書・製本雑誌・視聴覚資料）



大きい本のこと

遠藤彩夏(図書課職員)

ものがどんどん小さくなっていく。

スマホやタブレットといった電子機器は小さく・薄く・軽くなり、家電も軽量・省スペースを売りにする。コンパクトカーや軽自動車という言葉も、ポジティブに宣伝されている。食品は過剰包装が避けられ、なんなら本体すら小さくなった(先日久しぶりに食べた某お菓子の小ささときたら……)。

本もその御多分にもれず、コンビニが扱う本は小型のペーパーバックコミックや文庫本が主力だし、書店の文庫本コーナーもどんどん広がっていく。

最先端は電子書籍だろう。何しろデータだ、小さくなるどころか、重さも厚みもゼロ。

小さい本は、確かにいい。いつでもどこでも持ち運べて、寝っ転がっても読めるし、収納に悩むこともない(冊数にもよるが)。

わかる。いいよね。お値段も安いし。

対して、大きくて重くてかさばる本たちは、コスパとタイパをよくすることが至上命題かのような今の時代に、どうにも収まりが悪そうだ。

だがしかし、私は大きい本が好きだ。両手だけでは支えるに足りず、膝なり机なりに本体を置く必要があるような、大きい本が好きだ。

大きい本にはそうなる理由があって、絵を大きく見せたい画集や写真集、図録。映画のパンフレットもなかなか大きい。全体を俯瞰するもよし、隅々まで眺めるもよし。写真の細かい背景や絵画の筆遣いなど、大きいからこそわかる細部がある。

大きいというのは判型(タテヨコのサイズ)に限らず、厚みがある本も大好きだ。厚いといえば紙の辞書。厚い本にも厚い本なりの事情がある。表裏にびっしりと文字が書かれ、ページ数が多くなる辞書には、薄くて軽くて裏移りしない、特別な紙が使われていることをご存じだろうか。あの独特な触り心地はそこから来ているのだが、それでもあの厚みと重みのわがままボディ。

そんな大きい本たちの、図書館は最後の楽園かもしれない。

図書館は、あらゆる本を読みやすくするための場所だ。大きさや厚さを理由に、肩身の狭い思いをさせることはない。なぜなら、「図書は利用するためのもの」(図書館学の五法則より)だから。

ノートパソコンを開いただけでは持て余す広い閲覧机は、大きい本を存分に広げるためにある。コンセントの差込口がないのは、本を広げた時に邪魔にならないためだ。

参考図書コーナーの背の低い書架。三角屋根のような形は、分厚い辞書や辞典をその場ですぐに引くための書見台の役目を果たしていて、身軽に何冊も参照できる。

省スペースやコスパのよさがもてはやされる現代において、これは相当な贅沢といえるだろう

広い図書館で、大きい本を開いたら。

そこには小さな画面では味わえない、広大な景色が読者を待っている。

編集後記

スイスの留学研究についての巻頭言にはじまり、おすすめ本の紹介、図書館イベントや統計に関するご報告、図書館員による文章を掲載いたしました。みなさまにとって、さまざまな発見に繋がっていると嬉しいです！そして、ご多用にもかかわらずご執筆いただいた皆さまに心よりお礼申し上げます。

※掲載記事の著作権は札幌学院大学図書館にあります（無断転載禁止）。

紹介資料の写真掲載については各出版社に許諾いただいています。

心から御礼申し上げます。